

レルヒとロフラーノ —『騎兵の物語』における鏡像と「他者」—

田 中 剛

ホフマンスタールのこの短篇は 1899 年の発表以来、多くの読者や研究者を魅了しつつも、他方で解き難い謎を今日まで残して現代のわれわれの眼前に横たわっている。本論は作品分析そのものよりも、まずそれへの足掛かりを探すのが目的である。「試作 Schreibübung」である、と作者はこの小品を発行人への手紙において呼び、またそれへの言及も以後ほとんどないのだが、それでも幾度かの初期散文集の出版に際してはリストから除くことはなかった。¹⁾『物語』は単なる一般的賛辞を拒否するほど優れた作品には違いないとしても、ここにいかなる文学的価値をいかにして見出すかという議論になると、分析の方向は千差万別である。²⁾ 鉾脈は深層に隠されている。筆者は以下の論述において、ホフマンスタールが世紀末のオーストリア帝国の抱え込んだ病理にどんな象徴的表現をもって立ち向かったのかの一端を探り当てたいと考える。

物語は独立運動が激しさを増した 19 世紀半ば、オーストリア傘下のイタリアの都市ミラノに台頭した独立派を再制圧しようと呼び込んだ騎兵軍団の入城から始まる。語り手はまるで戦時ニュースでも読み上げるかのような口調でその様子を語り始め、この口調は作品のテーマそのものが深層心理の領野の奥深くにまで達すると推測されるにもかかわらず、最後まで変化することがない。つまり、この物語世界外の語りの視点はいわば焦点化ゼロに設定されていると同時に、等質的物語世界という特徴によって、そのまま内的焦点化にもスライドする可能性を秘めている。³⁾

『1848 年 7 月 22 日午前 6 時前、ヴァルモーデン甲騎兵团第二騎兵中隊の偵察分遣隊、すなわち馬上の百七名の兵を引き連れた騎兵大尉ロフラーノ男爵はサン・アレッサンドロ将校館を立ち去り、ミラノ方面へと馬を駆っていた。』⁴⁾ この美しい非武装のままの大都市はしかし騎兵た

ちの入城を何の抵抗もなしに許したのではない。光のなかにたゆたいつつみずからそのなかに溺れ幾重にも重なる色彩の絨毯の隅々には、マナラ軍団の歩士たち、ピサ軍団の姿麗しい学生たち、ベルガモ風衣装の伝令、さらには法王軍所属のナポリ義勇兵らが潜んでいたのである。しかし形勢に変化はなく、着実に武装解除を進めた末に捕虜護送のため隊を離れた兵を除いた78名の中隊は市門をくぐる。そのなかには、郊外の美しい邸宅を包囲し、かの18人の学生たちを捕えたアントン・レルヒ騎兵曹長も含まれている。

この短篇の主人公レルヒ（焦点化を受ける人物という意味で）は他の兵士同様「血の混じった埃だらけの顔」（非人格化された「Maske」）で、空虚な歓呼のジェスチャーを演じる群衆たちへの警戒の目を光らせつつティツィネーゼ門から出てゆく。この門には皮肉にもオーストリア人によって *Paci Populorum Sospitae*⁵⁾ と刻まれている。

こうして兵士たちの行進は、彼らが捧げ持つ刀身の放つ反射光に包まれて、町を勇壮な凱旋気分一色に染めたのである。ただし、この町への入城を指揮したのはロフラーノー男爵であったことを忘れてはならない。彼は自らにもまた中隊に対してもこの行動を断念することができなかった、と語られる。

中隊が市門を出て間もなく語り手の視点はレルヒのそれへと溶け込む。「ヴーイッチ・エピソード」がここから始まる。「好奇心」が馬上の彼の注意を沿道のとある淡黄色の家の窓辺へと誘う。彼は窓辺に垣間見た女性（まなざしの比喩）を、ひと昔ほど前にウィーンで出会ったスラブ人らしいと予感し、さらに確信をもって彼女と「ヴーイッチ」という姓であった女性とを同一視する。彼の脳裏には彼女の母性的な「鏡像」が浮かび上がる。その際彼女の体型や、身振りの特徴、さらに媚態のこもった微笑などが過去と現在の彼女を橋渡しする。窓辺の目簾、天竺葵の植木鉢、それに室内のマホガニー製の箆、素焼きの置物は神話的世界を模倣している。「白い」ベッドも欠けてはいない。これらも瞬時に彼の網膜に像を結ぶ。そればかりではない。部屋の奥で「髭のない、肥満した一人の男」が隠し扉の向こうに姿を消すのも見逃さない。しかし、レルヒはこの男を捕えようと駆け出さない。そうするには彼は「ヴーイッチ」のまなざしにあまりにも捕縛されている。彼女のまなざしのなかに映し出された男（実際には、レルヒは奥の部屋の正面に立ててある姿見に映った男の動きを知覚したのだが）を捕えにゆく、ということはどういうことなのか。可能であろうか。彼にとって見知らぬ男は、「ヴーイッチ」の鏡像を通して、まさにこの鏡像に癒着したもうひとつの鏡像であるにすぎない、とすればどうであろう。

次の引用を参照されたい。彼の知覚と意識の両レベルで捕えられた対象が、無意識の領野へと流れ込んでゆく。

Im Augenblick aber, während er mit etwas schwerfälligen Blick einer großen Fliegenachsa, die über den Haarkamm der Frau lief, und äußerlich auf nichts achtete, als

wie er seine Hand, diese Fliege zu scheuchen, sogleich auf den weißen, warm und kühlen Nacken legen würde, erfüllte ihn das Bewußtsein der heute bestandenen Gefechte und anderer Glücksfälle von oben bis unten, so daß er ihren Kopf mit schwerer Hand nach vorwärts drückte und dazu sagte: »Vuic«— diesen ihren Namen hatte er gewiß seit zehn Jahren nicht wieder in den Mund genommen und ihren Taufnamen vollständig vergessen —, »in acht Tagen rücken wir ein, und dann wird das da mein Quartier«, auf die halboffene Zimmertür deutend.⁶⁾

語り手は過去の記憶を正確にたどることのできないレルヒの目下の知覚(im Augenblick)を語りの時間に繰り入れる。にもかかわらず、いわば「ヴーイッチ」のまなざしによって骨抜きにされたたような彼のなとなくだるような視線(schwerfälliger Blick)、彼女の櫛の上を飛んでゆく大きな蠅(eine große Fliege)—これは後に彼が近郊の村で目撃する「花模様の汚れた絹スカートの女」への欲動をも予示するような蠅なのだが—さらにそもそもそれを追い払う敏捷さも力も萎えた手(Hand)などの知覚は語り手のものである。レルヒにとっての唯一の知覚は、「ヴーイッチ」の鏡像である。しかし、逆に言えば、それが鏡像であるゆえに、語り手はレルヒの知覚を合わせ鏡を使つてのように写し取ることができるのである。内的焦点化が等質的物語世界においても焦点化ゼロの機能を果たし得る鍵はここにある。

レルヒは「ヴーイッチ」という眼前の、肉体をもった女性を見ているのではない。彼女が、プラスかマイナスの、つまり暖かいか冷たいかの、在か不在かの象徴と化しているかの如く語られるにすぎない。彼は大儀そうに彼女の頭上を飛んでゆく大きな蠅を目で追うのだが、この蠅を追い払うはずの彼の手が彼女のうなじにあてられる様子は、それがまるで彼自らの意志から発した行為ではないかの如く語られる。「ヴーイッチ」姓を10年この方一度も口にしたことはなく、名前すらすっかり忘れていたレルヒが、かくも鋭く彼女を一たとえそれが彼女の鏡像であったとしても—窓辺に見出すとき、彼をそのようにしむけている欲望とはどこに由来するものなのか。他方、引用にもあるように、彼の「意識」は当日成功裡に終わった戦闘と一連の僥倖に占有されていた「ので」(so daß)、—と語られる—彼の舌は唐突にも彼女の家を駐屯軍のための、否彼自身のための宿舎にする旨宣言する。この「ので」はレルヒの知覚においてのみ可能である。彼は自らが「髭の男」に代わって、さきに垣間見た半開きの扉の向こうの部屋を占有するのを当然のこととして受け入れている。しかし、一体「誰」からその資格を得るのか。この宣言に対して彼女のほうは当惑して肩をすくめて笑うだけである。彼は中隊に追いつくべく速足で馬を駆る。やがて足取りの重くなった馬に揺られながら、レルヒはますます得体の知れない白日夢のなかに落ち込んでゆく。曹長の舌はその責任を負わねばならない。すなわち、『口外した言葉が圧力をかけ始めた』のである。今彼を制圧し始めた力は単なる観念連合ではない。つまり、彼は馬上で再びあのマホガニー製の家具と目簾、天竺葵の植木鉢のある部

屋を知覚しただけでなく、『サーベルの箆柄を寝巻の左ポケットに差し込んだスリッパばきの日常の生活形式』を自らの鏡像の一部として夢想したのだが、その際、例の『隠し扉から姿を消した髭のない男』が大きな役割を演じたとも語られる。この男は、レルヒの妄想のなかで先に目撃したとき以上の価値を帯びた鏡像となる。

Der Rasierte nahm bald die Stelle eines vertraulich behandelten, etwas unterwürfigen Freundes ein, der Hofratsch erzählte, Tabak und Kapaunen brachte, bald wurde er an die Wand gedrückt, mußte Schweiggelder zahlen, stand mit allen möglichen Umtrieben in Verbindung, war piemontesischer Vertrauter, päpstlicher Koch, Kuppler, Besitzer verdächtiger Häuser mit dunklen Gartensälen für politische Zusammenkünfte, und wuchs zu einer schwammigen Riesengestalt, der man an zwanzig Stellen Spundlöcher in den Leib schlagen und statt Blut Gold abzapfen konnte.⁷⁾

レルヒが「坊主か年金つき退職近侍」かと推測した人物からは、^{シニフィアン}示す言葉の換喩的連鎖が次々と生ずる。このような多重規定の連鎖を止める「結節」は何か。換言するならば、レルヒの欲望において欠如しているがゆえに求められている対象は何か。この欲望にはつねに示す言葉としての「他者」が組み込まれている。レルヒ自身は能動者となり、「他者」に働きかけ「結節」の産出物である様々な表象と無意識に戯れる。にもかかわらず、この「結節」は「髭のない男」の体によって否定的に語られるように、おぞましい「欠如」としてしか現出しない。その内部からは血のかわりにお金が流れ出る。しかし、だからといって語り手は「…であるかのよう」にレルヒは夢想した」というような接統法の表現を使わず、淡々と直接法過去の時制で語り続ける。

曹長の「白日夢」はこの日の午後に至ってさらに強度を増してゆく。「マホガニー家具のある部屋」が再び金銭的報酬への貪欲な欲求に連なって彼の知覚を侵す。夢想は「肉のなかにとどまり、周囲を化膿させてゆく弾の破片」と等しいものとなる。夕方近く、彼の偵察中隊は敵の潜伏を予想しながら進軍し、とある町の郊外に架かる橋をめざす。彼は前段で「ヴェーイチ」の家を鋭く知覚したのと同様に、ここでも「疑わしくはあるが誘惑的な」村落に引き寄せられる。兵卒二人とともに中隊を離れる。彼らを左右に配し、自らは「朽ちかけた鐘楼」に向かって正面から馬を駆る。地面には油が敷かれているらしく、慎重に並足で進む他ない。勲功を立てることと、彼の無意識の欲望、つまり自己に斜線を引いてそれを「他者」に欲望される対象として欲望することとは、レルヒにおいて矛盾なく運動している。

この村において、レルヒは馬上から家々の戸口の内部を垣間見る。そこでは粗末なベッドに薄汚い半裸の人間がごろごろしていたり、腰を痛めたように部屋のなかをのそのそ歩いていた

のだが、これは例の「髭のない男」に関して夢想されたいくつもの幻像、とりわけ貶められた「男性」性のイメージを浮かび上がらせる。ここでも、馬の鉛を引くよう鈍い歩みが目の回避し難い遭遇の準備をする。擦り切れた「花模様のある汚れた絹のスカート」を腰に巻き、肌をほとんどむき出しのままのサンダル履きの女がそこにいた。彼女は馬のすぐ前を横切るが、レルヒにはその顔が見えない。しかし、馬の鼻孔から押し出される息は、彼女の束ねられた、てかてかする髪の下の「うなじ」にあたる。示す言葉の換喩的連鎖がさらにレルヒの知覚によって捕えられる。彼が足元に転がり出てきた噛み合う鼠二匹に注意を逸らされている間に、女は入口に姿を消す。「乳首の垂れ下っている薄汚れた白い雌犬」を皮切りに、何頭もの犬、そのなかには「胴体が膨れ上がって太鼓のように張った」グレイハウンドがいたし、炎症をおこした両眼をもつ「白い」犬、劣等種のダックスフントもいた。追い払おうとピストルの引き金を引いたが弾はなぜか出ず、そのまま去ろうとするレルヒの前にさらに、屠殺場へと引かれて行く牝牛が現われる。

レルヒの食欲と羨望は「ヴーイッチ」から再生不能にまで破壊された「女性」性の象徴形成にまで及んだ。つまり、彼の自己分裂は妄想分裂態勢と抑鬱態勢との間の激しい心理的葛藤の産物なのである。彼はここに安住することはできない。しかし、「女性」性の、ということは「母性的なるもの」の想像的イマージをさらに象徴的母として形成するには（それがもし可能だとしても）、彼には準拠すべき「父の名」の示す言葉が欠如したままであることも明白なのだ。想像的ファルスは「父の名」を代置できない。「髭のない男」をめぐる換喩的連鎖によってレルヒがこの名を探し求めているのがわかる。⁸⁾

馬の歩みは以前にもまして遅くなり、周囲の事物もべっとり壁に貼りついたかのようになかなか過ぎ去ろうとしない。レルヒの時間感覚は麻痺し、悍ましいこの場をとてつなもなく長いこと彷徨っているように感じる。馬の変調がここでも不気味なものの到来を予告する。非人間的で疎遠だが、にもかかわらず確実に自分の一部ないしそれ以上であるような不気味なものとは何か。そしてついに彼は自己自身の鏡像とめぐり会う。

...bemerkte er jenseits der Steinbrücke und beiläufig in gleicher Entfernung von dieser als wie er sich selbst befand, einen Reiter des eigenen Regiments auf sich zukommen, und zwar einen Wachtmeister, und zwar auf einem Braunen mit weißgestiefelten Vorderbeinen.⁹⁾

橋の向こうとこちら側に、対照的に位置するレルヒと彼の鏡像がある。彼は自分が今乗っている馬以外にはこのような栗毛が中隊内に存在しないことを知っている。馬上の兵士は誰なのか確かめようと拍車を加えるが、相手も同様にして橋へと向かってくる。顔が見えない。しかし、この「者」が紛れもなく自分自身であることを知覚する。それは次の瞬間には消滅した。

そもそもこの知覚はどこからくるのか。それが彼であると教える者は誰か。

次の瞬間彼がさらに敵兵たちの真っ只中に突入し、獅子奮迅の戦いをする如く語られるのだが、それは何ら英雄的行為ではない。むしろ、極限にまで張りつめ、今や決壊した主体の亀裂から吹き出した「死の欲動」と等しいものである。この欲動は象徴的に、血みどろの戦いを繰り広げる独立勢力ピエモンテ軍と支配勢力の騎兵中隊の双方に向けての自己分裂（「疑わしくはあるが誘惑的な」対象／ロフラーノに体现される「父の名」）として提示される。こうした状況下にあるレルヒが敵味方を区別したであろうか。彼の知覚は敵兵と自分との攻防だけでなく、他ならぬ騎兵大尉ロフラーノが容赦のない怒りの表情で彼を睨む様子をも捕える。

...sah (er) dicht neben sich das Gesicht des Rittmeisters mit weit aufgerissenen Augen und grimmig entblößten Zähnen...¹⁰⁾

戦闘が終息に向かった頃、レルヒは突然一人とり残された自分を発見する。そして前方に、今まさに川を渡ろうとしている葦毛の馬に乗った敵の士官の背を知覚する。馬がためらっている。そして、この士官がくると馬首をめぐらせ、その若い蒼白の顔とピストルの銃口を向けたときには、レルヒの憎悪に満ちたサーベルはすでに敵の口に突きささっていたのである。彼は、鹿のように軽く、優雅に、死んでゆく主人の上に高く足をかかげるろ獲の馬を連れ帰った。この馬がどれほどの価値をもっていたか、それはロフラーノにレルヒへの銃殺刑の適用をまったく無言のうちに正当化する権利を与えるほどの価値をもったものであった。すなわち、大尉の「ひき馬を放せ！」の命令に対して、鞍に腰を据えたまま彼を凝視しつつ「異様な満足感を満たした幻像の重なり」に浸りきるほどの落ち着きを与えるものだったのである。なぜ、レルヒはこのような気分に捕縛されていたのか。自己自身の鏡像に出会ったことの帰結として、一体彼に何が「取り戻された」のか。しかし、この問題に関して、これまでの『騎兵の物語』をめぐる議論は残念ながらその解答を見出すことができなかった。

筆者はこの試論において、レルヒによってロフラーノの眼前に誇示された葦毛の獲物がまさに一瞬であれ「他者」となり得た曹長の「黄金数」、すなわち彼にとって永遠に失われていたかに見えた対象aの等価物であると結論づけたい。「髭のない男」、村の「薄汚い女」、自己の鏡像、馬上の若い敵の兵士のいずれにも共通するのは、「顔」を見定めることができないということである。しかし、「ヴーイッチ」の顔も例外ではない。レルヒは結局のところ彼女に「きめの細かい白い」肌以上のものを見ていないからである。「鏡像」とはそもそもそれを見る者とは鏡面を隔てて対峙している。曹長は確かにいずれの遭遇においてもそれらの「鏡像」を見たのだが、但しそれを背中の方から見ていたである。彼に、それが自己自身であると教えた者は、「他者」となったレルヒ自身であったのである。こうしたレルヒにとって、自己の欲望を「他者」の欲望として鏡像自己へと向け変えることは何の前提もなしに果たし得ることではなかった。つま

り、この目的のためには鏡像他者としての「母性的なるもの」と本来の「大文字の他者」である認知の審級への自己同一化の試みと挫折によって彼の行為が象徴化されていなければならない。上段で「妄想分裂態勢と抑鬱態勢」という表現を用いたが、これは「ヴーイチ」と村の「薄汚い女」の対照性に見られるように、また執拗に「雌」性が強調されるように、レルヒが鏡像他者の背後に自己を確立しようとしたときの精神的外傷を示しているし、「髭のない男」の身体から破れ出てくる金銭は、父性に鏡像自己を託した際に何度も滅び去った自分自身を象徴している。いわば彼自身の残骸、ミイラなのである。しかし、他人にはそれがどれほど悍ましいものと映ろうと、レルヒにとっては、このミイラがかつての彼の欲動の結実、根源的受動者としてのかつての彼自身であるゆえに、そこから特別な誘因力を受け取ることが語られる。

Aber in ihm war ein Durst nach unerwartetem Erwerb, nach Gratifikationen, nach plötzlich in die Tasche fallenden Dukaten rege geworden.¹¹⁾

「髭のない男」は、「父の名」が崩壊寸前の廃屋の壁から剥がれ落ちてゆく土のようにその認知の権威を失墜してゆくことの象徴としてレルヒが知覚した鏡像であるが、そこにはひび割れた鏡像他者としての「母性的なるもの」も重ね合わされている。これら両面において殺害された本来の自己を回復する手立てはどこにあるだろうか。

ここで、「母性的なるもの」が彼において想像的イマージの形成の段階でどれほど激しい死の欲動の攻撃に曝されたかをふりかえってみる必要がある。しかし、その際看過してならないのは、彼が村で目撃した「乳首の垂れ下っている、薄汚れた白い牝犬」、あるいは屠殺台へ引かれて行く牝牛、すでに屠られた仲間の血の臭いに怯え、足を突っ張りそこを動こうとしないこの牝牛の「哀れな眼」との遭遇が、レルヒの破壊本能の奥底に一筋の「母なるもの」への罪の意識を生じさせることである。この観点から見れば、「髭のない男」はいわゆるレルヒの抱く「去勢」への恐怖の象徴であるだけでなく、「金銭＝価値のあるもの＝勲功＝ろ獲」をその内部より生み出す「母」の身体の象徴でもあることになる。レルヒが「異様な満足感」に包まれて、「父の名」を自己の存在そのものによって騙ることに飽きないロフラーノ大尉にろ獲の茸毛を差し出すことができたのは、むしろ「母」の認知をこそ欲望したからではないのか。

レルヒが「ヴーイチ」の家を宿舎に定めることは、こうして自らを茸毛の馬と同様に彼女に捧げる欲望の表現となる。この馬は彼にとって、彼が「他者」として自ら認知し得る唯一の対象a、黄金数なのだ。

* * *

『騎兵物語』は成立からほぼ一世紀を経て、その秘密のヴェールを取り払われる時がそろそろ来てもよいように思われる。筆者は今回提起した諸問題を、いずれさらに詳細に論じる考えで

ある。その際にはもちろん、ホフマンスタールの他の短篇、特に『チャンドス卿の手紙』も同様の観点から考慮されることになるだろう。

註

使用テキストは、Hugo von Hofmannsthal: *Reitergeschichte*. Fischer Taschenbuch 1357. Frankfurt/M. 1973.

RG と略記する。

- 1) Rüdiger Steinlein, *Hugo von Hofmannsthals "Reitergeschichte"* (1991), Deutsche Philologie Bd. 110/Heft 2. p.209
- 2) Otfried Hoppe, *Hugo von Hofmannsthal: Reitergeschichte* (1980), Deutsche Novellen von Goethe bis Walser, Scriptor Tb. pp.70-73
- 3) 田中 剛 (1993) 『「親和力」あるいは物語のサイクロイド』 旭川医科大学紀要 (一般教育第14号)、pp.29-43
- 4) RG, p.33
- 5) Theodore Fiedler, *Hofmannsthals "Reitergeschichte" und ihre Leser* (1976), GRM, Bd. XXVI/Heft 2, p.144
Vgl. Otfried Hoppe, *Hugo von Hofmannsthal: Reitergeschichte* (1980), Deutsche Novellen von Goethe bis Walser, Scriptor Tb. p.51
- 6) RG, p.36
- 7) RG, p.37
- 8) 田中 剛 (1996) 『Günter Grass の〈局所麻酔をかけられて〉と「他者」の問題』 旭川医科大学紀要 (一般教育第17号)、p.37
- 9) RG, p.41
- 10) RG, p.42
- 11) RG, p.38